随筆

ロシアでの乾杯について

―ロシア人との酒席（ある程度格式張った酒の席）での乾杯について―

坪谷 治郎
つぼや じろう

自分には幸か不幸か酒とは全く縁が無く、社長や先輩達から飲みに誘われても残業をしていた方がいいというくらいでそのうち誘ってくれる人もいなくなった。自分が特に仕事が好きで仕事に情熱を燃やしていたという訳では決して無く、それくらい酒を飲むのが苦手だったということなのだが。

駐在員やソ連の各地を出張している中で、なかなか苦手としていたのがロシア人との酒席だった（正確に言えば人種としてのロシア人だけではなく旧ソビエト連邦に所属していた様々な国々の人達のことで、ここではロシア語を母国語もしくは母国語と同様に話す人達という意味で理解頂きたい）。

当時はある程度まとまった金額の契約が調印されたり、現地での買い付けや日本から輸出した機器類の始動調整作業が無事に終了すると、現地の企業から御礼の意味の酒宴が設けられるのが常だった。現地での滞在期間が長くなる場合は、返礼として我々側からも現地で御世話になった方々を招待して酒の席を設けるということも普通に行われていた。

小生が勤務していた会社の社長はソ連で生まれて現地で小中学校を卒業しているので日本語よりもロシア語が巧いと言っても言い程で、そういう人間が傍らにいて自分がやらねばならないロシア語の通訳というのは非常に神経をつかうやりづらい仕事だったのは言うまでも無い。

カタログや図面などを見ながら行う通訳というのは実際にやってみるとそれほど大変な作業では無く、日本側もソ連側も技術者は英語やドイツ語に堪能な人が多く、いちいち日本語に通訳しなくてもお互いに必要な事（技術的な事項）は理解し合えていることが多かった。現地の技術者は大体において、「この部分が知りたい」という目的意識がはっきりしていて、日本の技術者も相手がどの

部分を一番知りたがっているかということを経験的に掴んでいたことが多かったので、相手が全てを話す前に、それはこの部分のこういう話ですよねという話をすると、相手が嬉しそうに、その部分が一番我々が知りたいところなのです、というシーンは沢山あったが、そうなるとわざわざ技術的な素人の通訳を介して意思の疎通を図るという必要性が無くなるのも自明の理かも知れない。

しかしやや格式張った酒宴での話となるとそうもいかない。相手の国（人種）の文化、伝統にも繋がる場合があり、さらに諺のようなことを言われるとまったく手に負えないという場面も何度もあり、そのたびに冷や汗を出しつつ、自分の言語能力の足り無さを呪うしかなかった。

日本ではあまりなじみがない光景になるが、現地である程度格式張った酒席ともなれば自分のペースでちびりちびりとやったり、今日は飲みたいからグイグイと飲む、という訳にはいかず、お酒を飲む前には必ず乾杯の儀式みたいなものがあって、その乾杯に行き着く前に、なにがどうして、あれがこうして、これはこうで、と色々な話をしてという訳なので自分はこれこれに乾杯したいのだという形で音頭を取って乾杯に至る。基本は健康の為に、友情の為に、ここで働いている人達の為に、女性の為に、というのが定番ではあるが、場合によっては参加者全員にそのお鉢が回ってくるのでそうなると同じような内容の話は出来ないので油断がならない。

当然ながら話はロシア語で行わなくてはならず即興でそれをやるというのはネィティブでない自分にはなかなか面倒なので、ある程度は何をどういうように話すかという点を予め頭の中で組み立てをしておかなくてはならない。さらにその話の中にある程度のユーモアも加えて参加者の笑いを取ることが出来れば一〇〇点満点ということになる。

そこで無い知恵を絞って以下のスピーチを考えた。「自分がロシア語を学び始めた最初の頃に「世界Мир」と「平和Мир」という言葉がロシア語では同じ単語であることを知った。その単語そのものはロシア語を学ぶ前から知っていたが宇宙船（Мир）を指す言葉としての理解しかなかったが、このことを知ってさらにロシア語が好きになった。その後、仕事で何度も来るようになってロシア大地の自然のすばらしさを目にしたり、初めて会ってお互い名前も知らないのに世話をしてくれるロシアの人達の親切さにも感銘を受けた。こうした中で、我々がこのような関係をこれからも続けていくことが出来れば自分としても望外の喜びである。」（こういう話だけで終わらせてしまうと「真面目」なだけの話になるので、次におもむろにこう付け足した）、「こうして何度もロシアに来るうちに自分のロシア語も少しずつ進歩してきたと感じているが、ロシア語では「結婚（Брак）」という言葉と「欠陥商品（Брак）」という言葉も一緒である。それを知って自分はさらにロシア語が好きになった。」最後の部分を付け加えることによって、取りようによっては辛辣になりかねないものの、ほとんどのロシア人には好意的に受け入れられたと思っている。